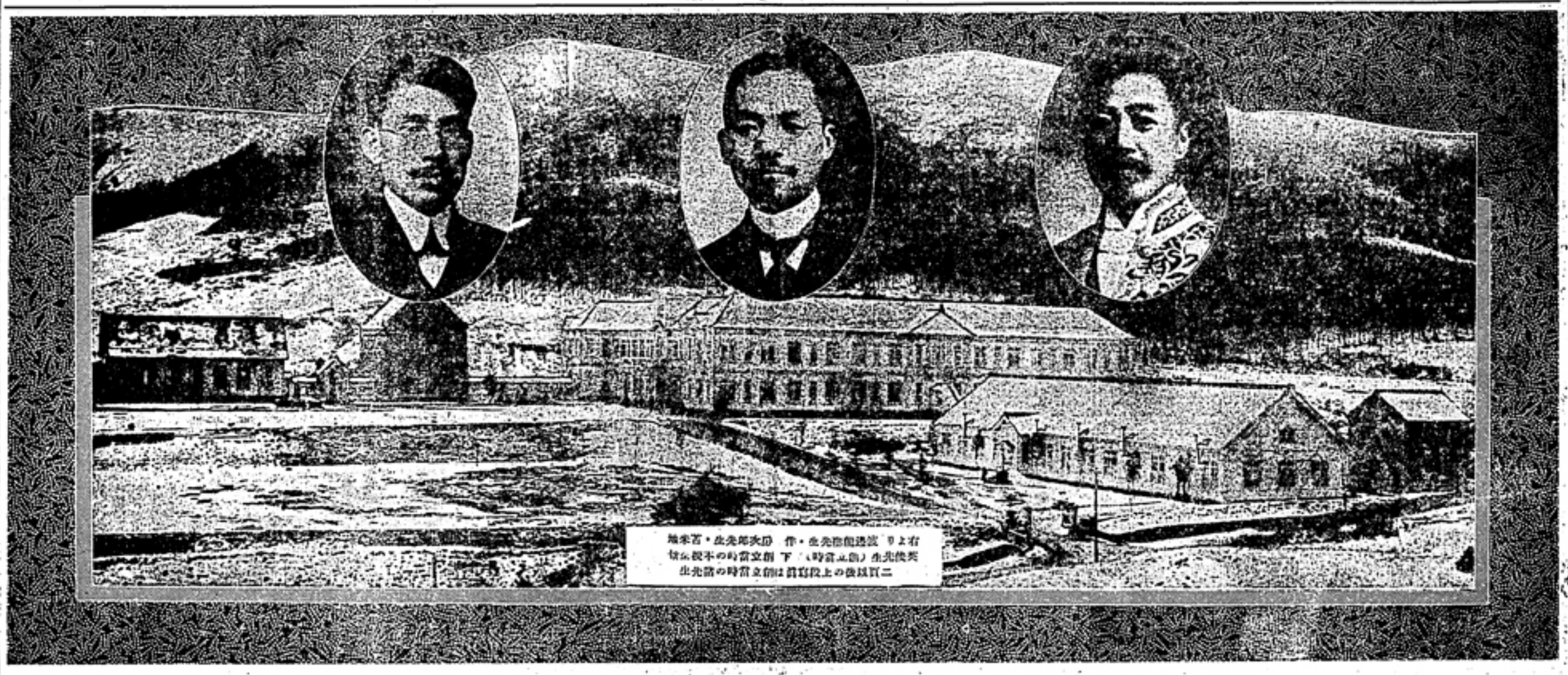
創立貳拾五周年記念回顧錄特輯號



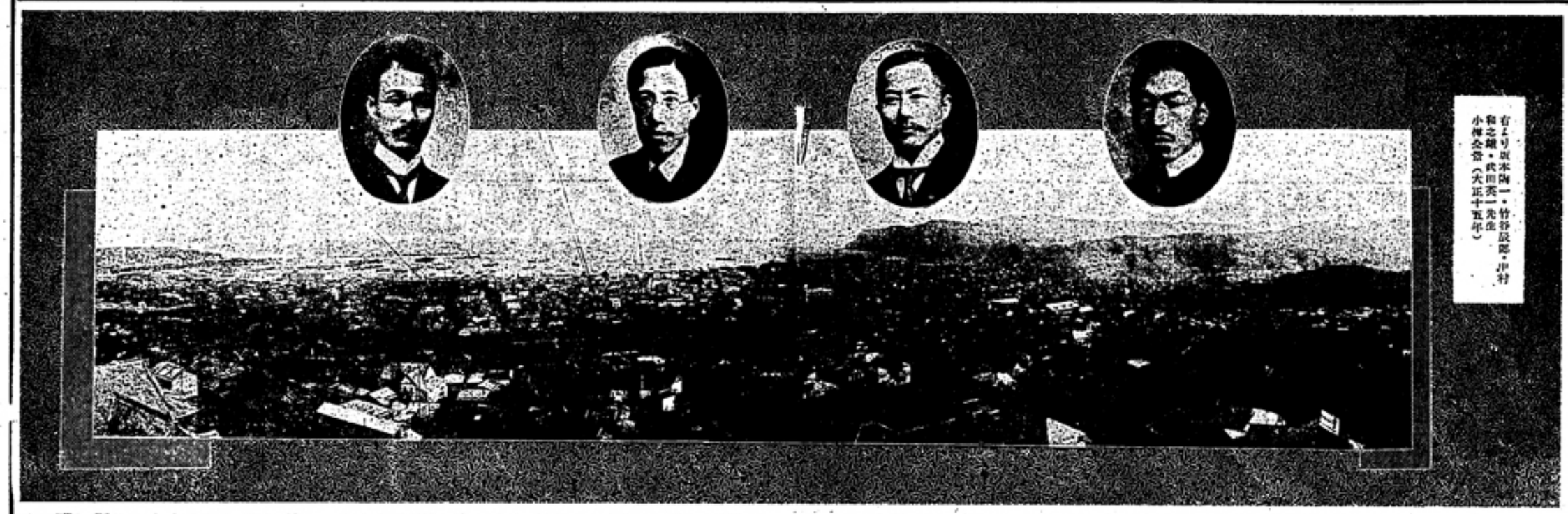
右より　渡邊龍聖先生・作間次郎先生・百瀬
英俊先生（創立當時）下　創立當時の本校
二頁以後の上段寫眞は創立當時の諸先生

創業の回顧

渡邊龍聖

創業引受の經緯

明治三十五年已むきとよりこの地に招かれて首席教諭兼教育部長たること七年、明治四十四年五月五日本校は開校した。當時東京帝國大學の前身、東京高等師範學校、各種學校等を開校、研究した。調べて見ると、高等師範學校はその當時、高等師範學校の一部に高等學校、高等商業學校、高等農業學校、高等工業學校、高等醫學校、高等商業學校、高等工業學校、高等農業學校、高等醫學校、高等商業學校、高等工業學校、高等農業學校、高等醫學校、高等商業學校、高等工業學校、高等農



右より坂本陽一・竹谷良郎・小村和之輔・武田英一先生　小梅会員（大正十五年）

貧しき追想と富める學園陣容の仰觀

高島佐一郎

その在校は、大正三年六月にはじまり大正十年六月にはれる七箇年、その中間に三年半の外國が挿まれてゐる、――と云ふがごとき、えにし深きこの組織の貧しいことは、その前後の教授陣といふ名稱を思ひ合はせるとき、寧ろ貧相である。

それに反して、創立二十五周年の小梅學園の体きい輝かしい現狀にいたっては、人をして仰觀せしめるものが多い。さうして、この學園の長大成は、要するに、國と國とを結びて成れる人的構成に歸するものと思はれる。私一個人に關する國際的の貧富と、校長學園の富める風貌とを、暫く對照して記したいと思ふ所である。

あとで觸れようと思ふが、校長學園ほども、貧つかの國をつき破るべき男々しい運命をもつたやうである。わけても私の在職期における教授陣は、この校風をもつたやうである。學園全體には開拓者の精神の燃えたち滿ちたれども、中に、戰前戰後の四年半を挾んでのことであるから、スタッフの移動は殊にはげしかった。まことに私が三年半の外國から歸つてみると、約半數の新顔がみいだされたことである。

もちろん、この間にたつて學校當局は、善々と、教授陣の強化向上につとめられた。すなはち前にして鶴一博士や佐野作博士を、又つづいて非常勤講師博士や三浦謙七博士を迎へられたが、後の二年間には上田良郎博士と細川嶺三博士とを招請された。それとともに、國語教授の陣容の大改革の大問題が、校長の手腕に、上の會議で公開講演をして聞いたのだったが、それに大國教授とともに前座を承つたこと、等々である。

それから私一個の回顧にいたっては、既述のごとく、教授陣の人に恵しえられるものが殆んどない。ただ忘れえない事は、五月となる年末、教授陣の校長お宅訪問に、同行の教授の中に、コオホル大學出身の愛用といふケプトと取り組んだこと、――いまの學校長が全盛をきはめた第二答辯會に三ケ月ほど出席になつてゐたを「部屋を向ひ合はせてゐた今日の手紙」に記されたこと、――學例後、もとの大國教授と、隣り合はせに住んでゐる私とが、よく談話を上下したこと、下に組みしかれたのが見を私で

あつたこと、――そのころ默々と調査室にもられた今の廊下の教授陣が、ほとんど悲鳴力を失ひ、ひ上げてゐられるのにうたれたこと、――蹴球におけるとの關係にスキングも國際的教授から推薦されたこと、――學例後の校長の後援會を小梅小學の全校に招いて、初年級の方々を不滅に苦しめてしまつた失敗、等々である。――だがそれらは、自分と、若いことではある。なほ長男がいま京都の醫大で勉强してゐるのだし、また等の日にはチョチと私を迎へてくれた三角マントの次男が、最高學校の最上級にゐるのだから。だが斯ういふ高等學校の種類、街城を小梅小學の全校に、彼の前で吐いて

（ヨーロッパの練習を終け、冬節二回の小生活を開始した。それは、ゲーデン先生に際会して貰つた記念である。この間、我々はゲーデン先生を中心として親密なグループを結成するとともに、絶えず指導先生のできばとしたお話を受けたのであつたこともあつた様だし、横浜会にはあなたの合唱の指導をやつて頂いたこともあつた。又一度、時々忘れられが到先生の奥さんに郷愁をお聞かれたことがあつた。最に踊した事情は、僕はもうよく覚えてゐないが、一寸驚き過えて感くべきだと思ふ。きつと暴風、青木、直島、及び僕等が出て終つてから実際的に更に郷を除民させた彩新井正治等も多分この国際の間の文を求められてゐると僕は想像するから他は、恐だ不確かな僕のこの推文も僕ひ例かの資料にはなるのかと思ふ。その後間が僕の中に郷に郷郷時代の恩師の下に郷郷となつて赴任してゐる。函館にもゲーデン氏夫妻、村瀬夫人かもゲーデン氏夫妻、村瀬夫人かと共に横浜旅行に行くから帰れ郷郷、当時大学の郷の郷郷を郷郷郷

右より　開立當時の名物教授
編纂部（昭和元年）
相撲大會（大正十一年）
（年一十正大）の南大會（大正十一年）

綠丘脫舌

第十八期生　川島豊秋

過去を顧みる事は餘り好まぬ男である。しかも、考へる事の多いのに、考へる時間を持たない現在の身が、餘りに考へる時間を多く持ち過ぎたが爲めに、いたらぬ事までも考へ出した過去の時代の事を過ぐしようとする。過ちもなければ不幸ひなりである。

×

過去の鏡を一瞥して思ひ出して見る。私は一人一人の先生について色々な思ひ出話を持つてゐるので、懷しい限りではあるが、反面に、先生方から、ようやく忘れ去つて居た過去の私の名前と顔とを思ひ出されたら、朝の御飯に餘りうまくなくなるに違ひない。思へば、問答と云はれたものである。

懷はれたくせに、懷しがり、懷しがると言ふ所に、矢張り切つても切れぬ縁れ縁があるのかもしれない。

尤も、現校の先生と言ふものは、綠丘式のボーイみたいなもので年々色の變つた色んな所生に接して行くのだから、いちいち昔の所生をおぼえてゐる程の餘裕もないだらうし（所生はそれに反して所生が皆に覺かれ過ぎたのだから永遠に忘れ得ぬものがあるだらう）又、よく考へて見ると、無駄なもの、講義をする中に、何かやらせてみたくなると見えて、時々、油をかける事がある。

私ども、今から思へば、その油をかけられた方の所生であつたのかもしれない。先生方も罪なものである。

何と言つても、言さんは恐かつた。人の持つ精神力と言ふものが、どんなに強いものかを、つくづく感じる。

言さんは今、校長さんである。言ふ。私には、校長さんとしての言さんよりも、あの本に埋れた小さい部屋で、靴のストーブを圍み者の眼に成り代にくべながら、長椅子に倒るゝところの野人、言さんを思ふ所である。

此もれてはいたはられた私の三年間の師、言さんに、感謝して敬意を表しよう。

卜部先生は、名前程ガツ〳〵先生ではなかつたと、今しみじみと思ふのである。

私が職員室に入つてから、常に、卜部先生に、私に御教授になつたものである。

「性格のない女」であつた私を、「性格のない女」にされた先生は、誰れよりも私を甘やかしわけて下さる事と思ふ。

とまれ、昨今、母校の先生方の、ボッボと出て現はれ出しては、面白い限りである。

高橋先生さんにだつて、私も此処も共に立ち同じ立場なる關係には不幾個なる若々しい思ひをした。此は全く私に思ひ出を與へられたものであつた。

かゝる如く、淡い自然の結晶

それ自身に思ひアポリアに先生も此處も共に立ち同じ立場なる關係には不幾個なる若々しい思ひをした。此は全く私に思ひ出を與へられたものであつた。

かゝる如く、淡い自然の結晶

綠丘學園よ

第十九期生　白山友正

綠丘學園の三年間は、私達同期生にとつての生命の快よい調べであつた。私達は、昭和七年（昭和七年綠丘の開學、紀元二千六百年の記念年）に入學した。

（1）師弟の融和

綠丘の先生方は、みんな善い人ばかりだつた。何故、綠丘はじめ數へてゐるのか、それは、記念の年に入學したのだから、それで正後、數へて居るのである。

（2）學園の自然美

入學當時、校舎の周りは、全然ないてゐたのが、まだ耳に殘つてゐる。圖書館の、はまなすの花、校庭の芝生に、樹、山上グランドの桃園、冬は、シャンツェ、あたりの雪の眺め、夏の小鳥達の鳴めなど、こんなに自然美に恵まれた學校はざらにあるものではない。秋の機の下で、初學を語る若い魂を、從突んで聞いて上げたことがあつた。

（3）圖書館の完備

苦米地館長以下の努力で、

回顧錄

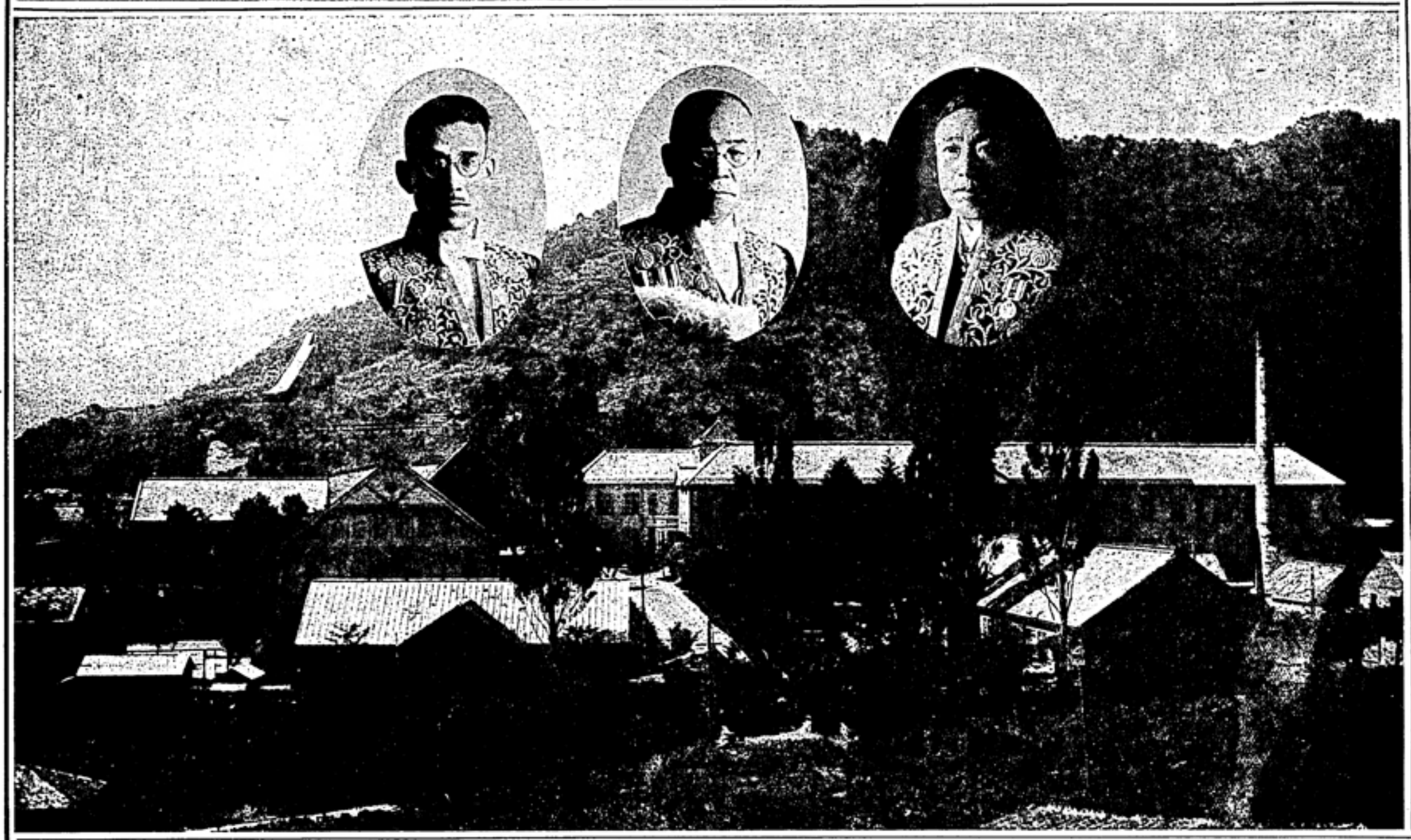
第二十期生　村岡英一

創立五周年を迎へた母校は、今日、二十五歳の年を迎へ、四年間を顧みて、大中小、此の中に、北國の一員として、母校と共に、歩んだ、此の、一年間を、思ひ出の、一頁として、此の、一年間を、思ひ出の、一頁として、此の、一年間を、思ひ出の、一頁として

緑ヶ丘新聞

本紙一部　金六錢
一ヶ年時諸料　金五十錢
印刷所　株式會社太陽堂印刷所
編輯兼發行所　小樽高等商業學校
編輯部　電話一三五〇番
振替小樽五〇一番

創立貳拾五周年記念特輯號



（右ヨリ）
初代校長　渡邊龍聖閣下
二代校長　作房次郎閣下
現校長　苫米地英俊閣下
（下）
現學園全景

校歌

時雨音羽作歌
杉山長谷夫作曲

金鱗をどる渺々の
あけぼの稱ふ浪の唄
エルムの花に若人の
涯なきのぞみ數々秘めて
夢うるはしの
緑ヶ丘よ

夕陽映ゆる白樺の
梢をわたる風の唄
慈愛の山のふところに
銀翼みがき駿足秘めて
唄ほがらかの
緑ヶ丘よ

蒼穹はてず道つきず
はるかに仰ぐ北斗星
榮冠迎ふこの腕に
飛躍の力ひそゝき秘めて
花咲き匂ふ
緑ヶ丘よ

健腕拓く五大洲
凱歌はあがる我母校
感激みてる若人の
血潮に清き教へを秘めて
春永遠の
緑ヶ丘よ

創立貳拾五周年を迎へて

校長　苫米地英俊

一

永遠に伸びんとする學校の生命、それが。暫へ僅かに二十五ヶ年を經過したに過ぎないとしても、その短日月の間に育くまれた緑丘の精神は本校の礎であり、將來幾千萬人を教養する根本思想、訓育の指導精神となるものである。かゝる重大事の成し遂げられた過去の歴史を追懐し、直接又は間接に本校の發達に寄與貢獻せられた各位に謝恩の意を表し、三千の卒業生の前途を祝福し、既に故人となられた關係者の冥福を祈るのは決して意義のないことではあるまい。今回の祝賀は感じた意味を持つことは勿論であるが、更に重大な意味が包含せられてゐることを看過してはならぬ。吾人はこの四分の一世紀を契機として崇新宏大なる氣分を以て學園の向上發展を企圖してゐるのである。

序上の意味に於ける記念式を挙行するに際して茲に一言を敍して全校の奮起を切望するものである。

現今の世相は混沌として變化極まりなく、長論歸を一にせず、思想も亦動搖して、教學の指導精神にすら疑惑を懷く向がある。乍併、本校には渡邊初代校長以來不動の教養方針が確立してゐる。本校生徒は他に煩はせらるゝことなく、本校教養の精神を遵奉し、この信念に基づき一意報國に邁進しなければならぬ。

二

本校教養精神を理解せんとせば先づ第一に高等商業學校の存在理由とその使命とを熟知しなければならぬ。

凡そ我國の學校は、その程度、その種類の如何を問はず、何れも皆、國家有用の材を養成するために存置せられて居るので、決して個人の利益を目標としてゐるものではない。國家のため己を空うして奉公の誠を盡し、敢てその報酬の如何を問はない。斯の如き人物を養成するのが我國の學校が懷く根本精神である。之と同時に、至誠奉公の結果が個人に反映し、それを利潤するのは當然の道であり、且又、當然であらう。

奉仕に對する報償は、暫く僅少であつてもその與へる滿足は多大である。悲した寡欲の人には必ず人間としての甘味、ゆかしい薫がある。寛く力行勤勉し、熟慮果斷、全身全能を奉公に捧ぐる人を人格者といふ。

高等商業學校は實業に從事し、各自の職業を通じて國家奉公の誠を盡すべき人格者の完成教育を授くる機關である。高等商業學校は職業教育を授け、卒業生を就職せしめる目的のための存在では解じてないのである。この簡明なる根本義に付、世間に往々誤解がある樣であるが、この點は明確に理解しておかねばならぬ。

序上は各高等商業學校のみならず、他の實業專門學校にも共通であるが、本校は創立以來此の精神を一貫し優秀なる人格者を多數、國家に奉公せしめ、二十五年の歴史に所謂學校騒動を起したことのないのは本校の誇である。

三

經濟學では最少の勞費を以て最大の効果を收むべきを說く。この原理は決して吾人が勞苦を回避すべきことを說いてゐるものではない。勞費を最善に活用し得る方策を考案すべきことを敎ふるものである。隨つて吾人は勞苦を惜まず、身體の健全なる發達と智能の完全なる啓發とに全力を傾倒し、社會に出ては深身の精力を盡して奉公に邁進し、その深身の餘すなき精力をして最少の勞費たらしめねばならぬ。

四

晩近學校教育の實際化の聲が高い。その實際化とは何を意味するか、稍々明確を缺く點がある。併し、吾人の見を以てするならば、高等商業教育は完成教育であり、大學への階梯ではない。大學と高等實業專門學校とは質的相違を持つが、程度の高低に差異を認むべきでなく、高等實業專門學校の卒業生は、產業界の中堅及首腦部を組織し得る人格、健康及才能を有する人材を養成する所である。隨つて、高等商業教育は目先に役立つ人間丈けを目標としてはならない。教授は常に一方に研究を續けつゝ、他方教授に從事し、各自擔當の學科目に從つて、或は學生の啓發を目眼とし、或は又學生に實地の知識を授け、互にその分限を守り、他を侵すことなき必要がある。これら相互間には輕重の差は斷じてない。各獨自の價値を有するもので、理論的學問は思考力を與へ、變化極りなき新事態に直面して之を裁斷し、工夫を凝し、改良を加へる事に役立つものである。かゝる教育は教育の實際化の聲に依て歪めらるべきものではない。寧ろこれこそ新時代に應ずべき人材養成に缺くべからざるものである。と同時に學生の充分消化し得ざる內容を盛り、又は抽象理論に終始して應用の才を養ふ域に達せざるものは百害あつて一利ない。この方面に携はる責任者は自己の研究の深まるに從て學生の能力の測定を過ち易いものである。

實用を主眼とする學科目に於ては、その本旨を先づ徹底せしめ、然る後に千變萬化せる實務に應じ直ちに之を理解し之に適應し得らるゝ程度の理論を教授する必要がある。而して、そこに吾人は眞の實際化を見出すのである。

學理を第一義とする前者、實用を主眼とする後者、その行き方は異るが、價値に相違はない。加之、この兩者相俟つて初めて完全なる高等商業教育の任務が果されるのである。若し此事を度外視し各使命の外に逸走し、又は時代の要求に追隨して、目先に役立つ教育に陶醉するならば、成は現代の一部の數心を買ふことは出來得やうが、次の時代には必ず淘汰せられる。

悔いるときが來やう。

この點に付、本校が劃一を遂げて、而も統一に就き、和衷協同、常校の使命に熱誠を傾け、獨自の天分を守り、特異の本領を發揮してゐるのも我が學園の一異彩である。

五

孔子は三千の弟子を三千に仕立てたといはれてゐる。これは非凡の事で、我々凡夫のよくする所でない。併し幸なることに本校に於ては、人格性格の各々異つた、而も卓越せる人物が揃つてゐる。その結果、創立以來、人格の修養に於ては學生間に自主自治の風がある。學問研究は熱烈を極め、圖書館の整備に大なる努力が拂はれ、その利用率頗る高く自學自習を學生の誇としてゐる。常に責任を重んじ、禮節に叶ひ、謙讓にして親切、學說に因はれて左右に偏せず、豪放に流れず、細事にこだはらず、事に當つて明察果斷、小智小能の技巧に陥せず、常に公明正大、質實剛健にして氣宇明朗、これが學生の氣風であると共に卒業生の特色でもある。

和して同せざる校風、これあるが故に、同窓和親し、母校を愛し、師を敬ひ、相倚り相援くれども、黨を組み、派を立てない。そこに社會人としての融合性が見出され、一意奉公があらゆる形を粧られ、各方面に歓迎せられてゐる。

若し本校に改善の急を要するものがありとするならば、それは健康に對する更に多くの留心であらう。卒業生中、頗る有爲、將來を嘱望せられた人々で今は故人になつてゐる、思出しても殘念に堪へない人の多いことは如何にも殘念至極である。

併し渡邊初代校長作二代校長の御夫妻を初め多數の病教授諸多數の同窓生が遠路來會せられたことは他に多く比類を見ない慶事である。

六

此の光輝ある歴史と傳統とを永遠に傳へると共に、學園の精神を彌々發揚して奉公を誓ひ、本秋眼前を迎へ奉り、國體信念を益々强固にし、本校の使命を全ふし度いと念願してゐる。

論説

協同體主義の限界

東京帝大教授　經博　上田辰之助

一

現今世界を通じて思潮と高まりつつある協同體の思潮を代表するものとして比較的もつとも世人の注意を惹いてゐるのは既ひもなくナチスドイツの「身分國家」とファシスタイタリーの「組合國家」との二つの國家主義であらう。ことに、獨伊兩國は法律といはず、經濟といはず國民生活の全面に亘つて十九世紀以來の自由主義を清算し、其の所有の國體主義を以て夫々新しき國家秩序を建設せんと努力してゐる。この新秩序の基礎として提唱されてゐるのが「職分原理」であり、それが特に顯著な實現を與へられてゐるのは、私見では、所有權、企業、及び勞働の三つの主要制度に於てである。企業及び勞働の場合は別問題として自己の職分を自覺し、所有權の場合は何人に對しても職分を課せられてゐるかについては一應の說明を要する。それは先づ社會的に考へる人間の義務、職責を果すべき人を動かして職分を課せられてゐるのである。少くとも、其の義に充滿の目標があると見なければならぬ。

然るに右の事實と並んで、彼は夫れ以上に人々を印象づけてゐることは對內的には群制に協同主義を高揚し、諸々之を實行に移すべく意氣込んでゐるナチスやファショの國家も對外的にはかなり攻勢的態度を持し、時には帝國主義を想はせるやうな政策さへ採つてゐる現狀である。いなヒトラーやムッソリーニの名前は一般世人からは全世界にも徒戰しかねまじき力の權化の代名詞の如く考へられてゐる。そして、協同國家の熱誠なる指導者ムッソリーニはイル・ヴォーチ、ヒットラーはライスフューラーたる彼等の中間は時と忘れられてゐる。事ほど左樣に對外的の活動なり、氣勢へなり、が彼等を特徴づけ、往々にして誤解化してさへゐるのだ。

此の事は最近のフィンランド占領やポチオヒ孤及び併合の問題を思同せば十分で隱更文脈を以て立證するまでもない。殊にムッソリーニの場合については、聯盟の對伊制裁案に惨敗した今日、その傳意想ふべしである。

其處で、われも協同體研究者の認識すべき事實は世界の現狀においては協同體の國ぶり國境を局限として、その效方に及ばないといふことである。夫れば かりではない。ヨーロッパの協同國家は國民に向ては自由主義や個人主義をさながら惡魔の誘惑の如く排除してゐながら、世界の一成員としての自由は平氣で其の邪道を說むの矛盾を敢てしてゐるかの觀がある。「公益は利益に優先す」といふ原則を國境の外まで擴張させることは何故できないか。

尤も協同體理論は植民地政策に二樣の觀點を與へてゐる。其の一は資本主義、他は協同體的觀點である。ドイツ及びイタリヤの對外政策は資本主義的に出發してゐるが、ドイツ及びイタリヤの對外政策はこれらの論據によつて正當化されようとしてゐるかも知れない。何へば、近頃のイタリヤ文獻によれば、國民主義は「國民主義（民族主義）は本年一月「イタリヤの立場開明」と題する小冊子を公刊し、四人の著名な學者は日による自國擁護の論策を載せてゐるが、其のうちヴォット・ダイネッリ氏所論の一節に「イタリヤは其の民族的天資と活力とにより此處地中海の中央において全體に且つ熱意を以て文化を開花せしめ之を世界に發揚して來た。然るに此の文化のため、又人口增加のため、必要が增大したに拘らず領土が之を滿足するに十分なる手段を提供しないとすれば、其の時こそ、國民にとつても、國家にとつても、はた又文化のためにも、其の有せずして、然も資源に恵まれるものを他所に探し求めることは至上命令たる」（同書三四頁）といふ暗示に富む言葉が見出される。

此の言葉のうちに先づ强く出されてゐるのはイタリヤの經濟的要求であるが、それと共つてゐる現狀である。いなヒトラーやムッソリーニの名前は一般世人からは全世界にも徒戰しかねまじき力の權化の代名詞の如く考へられてゐる。そして、協同國家の熱誠なる指導者ムッソリーニはイル・ヴォーチ、ヒットラーはライスフューラーたる彼等の中間は時と忘れられてゐる。事ほど左樣に對外的の活動なり、氣勢へなり、が彼等を特徴づけ、往々にして誤解化してさへゐるのだ。

此の事は最近のフィンランド占領やポチオヒ孤及び併合の問題を思同せば十分で隱更文脈を以て立證するまでもない。殊にムッソリーニの場合については、聯盟の對伊制裁案に惨敗した今日、その傳意想ふべしである。

其處で、われも協同體研究者の認識すべき事實は世界の現狀においては協同體の國ぶり國境を局限として、その效方に及ばないといふことである。夫れば かりではない。ヨーロッパの協同國家は國民に向ては自由主義や個人主義をさながら惡魔の誘惑の如く排除してゐながら、世界の一成員としての自由は平氣で其の邪道を說むの矛盾を敢てしてゐるかの觀がある。「公益は利益に優先す」といふ原則を國境の外まで擴張させることは何故できないか。

尤も協同體理論は植民地政策に二樣の觀點を與へてゐる。其の一は資本主義、他は協同體的觀點である。ドイツ及びイタリヤの對外政策は資本主義的に出發してゐるが、ドイツ及びイタリヤの對外政策はこれらの論據によつて正當化されようとしてゐるかも知れない。何へば、近頃のイタリヤ文獻によれば、國民主義（民族主義）は本年一月「イタリヤの立場開明」と題する小冊子を公刊し、四人の著名な學者は日による自國擁護の論策を載せてゐるが、其のうちヴォット・ダイネッリ氏所論の一節に「イタリヤは其の民族的天資と活力とにより此處地中海の中央において全體に且つ熱意を以て文化を開花せしめ之を世界に發揚して來た。然るに此の文化のため、又人口增加のため、必要が增大したに拘らず領土が之を滿足するに十分なる手段を提供しないとすれば、其の時こそ、國民にとつても、國家にとつても、はた又文化のためにも、其の有せずして、然も資源に恵まれるものを他所に探し求めることは至上命令たる」（同書三四頁）といふ暗示に富む言葉が見出される。

此の言葉のうちに先づ强く出されてゐるのはイタリヤの經濟的要求であるが、それと共に、時代は之を認めようとする所有者に對局的乃至部分的に制限を加へ、時には之を奪はん

學校の三つの窓

名古屋高商教授　赤松要

（一）

學校を一つの有機體にたとへる。彼女は協業を組織し、成長し、子を保育する

學校、とくに、いまわたしどもの關係してゐる專門學校としての高等商業學校には少くとも二つの機能がある。一つは研究である。この二つの機能をはたす學校の組織は教授であつて、教授は一面において學究者であるとともに、また他面において教育者であれねばならぬことはいふまでもないもちろんこの二つの機能は別々のものではない。教授が學究者であることなくして教育者でありえやうとはおもはれないし、また教育者でなくして教授たりえやうとも思はれないからである

學校したがつてまた教授がこの二つの機能を遂行するためには學校はその施設を設けねばならない。いふまでもなく、教育の施設として教室などの校舎が設けられてゐる。また圖書館、實驗室、實習室、調査室、研究室などの施設が校内におかれてゐる

これらの施設はみな學校、したがつてまた教授がその二つの機能をはたすための學校の機關である。しかし、これらの施設には自から、由として研究の施設であるものと、また由として調査の施設であるものとがある。このうち由として研究の施設であるものは學校ないし教授がその協業を組織する口ともいふべきものである。わたしはこれを「學校の窓」といふのである

かゝる學校の窓は三つある。圖書館と實驗室と調査室これである

（二）

圖書館はもちろん調査機關でもある。この意味で圖書館は多數の教授と調格的な存在として學生を調査する。それはたしかに、おんどりなしにおんどりが鳴くことができる前には一人の教授なくとも、圖書館だけで學生を育てることができるであらう。少くとも教授に對してよりも圖書館に對してより大なる負債を受けてゐる學生の存在はゐるだらうとおもはれる。平はゐるだらうとおもはれる。圖書館と教授とがあつて教授のゐない學校が考へられないことともない

しかし學校圖書館は圖書の施設である以上に、教授研究の施設であり、學校の窓としていまで最も大切なものである。圖書館のない學校は考へられないそしてまたその職員圖書費の大部分は教授の研究圖書のために費されてゐる。學生の手にふれない圖書によつて、われらの圖書館、そしてまた教授が繼續づけられてゐるのである。ひとして學生は教授はとに語學が達者ではない

圖書館は、由來上つた、幾種せられた觀念の貯庫であつて、教授は一冊または數冊以上の書物に、加工し或は加工せずして教室の學生ノートに、これをおく引用するのである

しかしわたしは教育する、研究機關としての大學と專門學校との相違はたゞこの由來上がつた知識の性質を展開してゐる圖書館の性質であるか教授であるか、換言すれば圖書館費が大であるか小であるかの相違のみに由つてゐるといふことを少くともわが日本において、教授のえらさが圖書館の大小に比例せざるを得ないといふことは中のことであるか、不幸なことである

（三）

實驗室については、わたしは門外漢であるから、専分の權能をなしえない。實驗室は研究機關であるとともに教育機關であるとはれる。そしておそらくは、一般的に教育機關としての目的として設けられてゐるやうである

故野口研究を發表せられてゐる小泉島太郎博士の圖書實驗室と隣じやうな研究機關が、どの學校にも設備されてゐるかどうかを、わたしは知らないのであるが、たしかに學生用の機械の數十倍はどの學校の實驗室にも備へてゐると聞いてゐるのである。たゞ義務的學生の非常せられたわたしどもの學校では、商品實驗室のみならず、商業心理、商業物理などの實驗室は教育機關であるとともに、有力な研究機關としての一面を備へてゐると、わからないながら、わたしに感ぜられるのである。こんなことから考へると、實驗室は「學校の窓」としては特別に新しい窓であるが、われらの學校は社會現象の中に織込まれてゐる自然を數窓を圖書館よりもあとから作つたのである。しかし、とにかく實驗室は主として教育機關としてはじめられ、これが次第に研究機關の一面を成長せしめたものとおもはれる。調査機關としてはおそらく學校における自然科學的施設の用ないし機能であつたであらう。そのためにこの機關が早く學校に設けられたのである。しかし研究機關としては「社會現象のうちにある自然」を觀る「學校の窓」として獨自の窓から學校の研究室は教育機關に新しい窓として調査機關としては圖書館よりも新しい窓である。われらの學校は社會現象の中に織込まれてゐる自然を觀る窓を圖書館よりもあとから作つたのである。しかし、とにかく實驗室は主として教育機關としてはじめられ、これが次第に研究機關の一面を成長せしめたものとおもはれる。調査機關としてはおそらく學校における自然科學的施設の用ないし機能であつたであらう。そのためにこの機關が早く學校に設けられたのである。しかし研究機關としては「社會現象のうちにある自然」を觀る「學校の窓」として獨自の窓から學校の研究室は教育機關に新しい窓として調査機關としては圖書館よりもあとから作つたのである。しかし、とにかく實驗室は「學校の窓」としては特別に新しい窓であるが、たしかに學生用の機械の數十倍はどの學校の實驗室にも備へてゐると聞いてゐるのである。たゞ義務的學生の非常せられたわたしどもの學校では、商品實驗室のみならず、商業心理、商業物理などの實驗室は教育機關であるとともに、有力な研究機關としての一面を備へてゐると、わからないながら、わたしに感ぜられるのである。こんなことから考へると、實驗室は「學校の窓」としては特別に新しい窓であるが、たしかに學生用の機械の數十倍はどの學校の實驗室にも備へてゐると聞いてゐるのである。たゞ義務的學生の非常せられたわたしどもの學校では、商品實驗室のみならず、商業心理、商業物理などの實驗室は教育機關であるとともに、有力な研究機關としての一面を備へてゐると、わからないながら、わたしに感ぜられるのである。こんなことから考へると、實驗室は「學校の窓」としては特別に新しい窓である

われらの學校は社會現象の觀察機關としてはじめられ、これが次第に研究機關としての一面を成長せしめたものとおもはれる。調査機關としてはおそらく學校における自然科學的施設の用ないし機能であつたであらう。そのためにこの機關が早く學校に設けられたのである。しかし研究機關としては「社會現象のうちにある自然」を觀る「學校の窓」として獨自の窓から學校の研究室は教育機關に新しい窓として調査機關としては圖書館よりもあとから作つたのである。しかし、とにかく實驗室は「學校の窓」としては特別に新しい窓であるが、たしかに學生用の機械の數十倍はどの學校の實驗室にも備へてゐると聞いてゐるのである。たゞ義務的學生の非常せられたわたしどもの學校では、商品實驗室のみならず、商業心理、商業物理などの實驗室は教育機關であるとともに、有力な研究機關としての一面を備へてゐると、わからないながら、わたしに感ぜられるのである。こんなことから考へると、

シエイクスピア ステイヂとスクリーン

小林象三

一九三五年と一九三六年とにおける英米映畫界の大きな現象は、シエイクスピア物の映畫化であらう。さきには既に日本でも上映された「真夏の夜の夢」があり、新しくは「ロウミオウとヂユーリエット」「お嬢に召すまえ」がある。これ等のものについて述べるに先だち、沙翁物の映畫について回顧すべき歴史的のものがある。それはフオーブズ ロバートスン編とガートルード エリアットの一座の演じたものであつた。フオーブズ ロバートスンこそ「ハムレツトを演ずる俳に生れた」と言はれた名優である。私は嘗ひにも十數年前この映畫をみてその演技に感服したが、同時にまたそのテムポの遅るしくスロウなのに驚いた。これは別かにスクリーンにステイヂその儘の演技をした俳めであり、また監督はかゝる名優をこなし得ず、それこそ彼の「御城に召すまえ」に演じさせた結果であつたらう。かの謂所正次郎出演の映畫「忠臣の技方」におけるテムポのスロウな彼の演技と対照するも興味深かつた。これは特無解時代に「マクベス」をみた事と倫敦でダグラスフエアバンクスとメアリ ピツクフオード共演のトーキ「じや〜馬鹿もし」を面白く見た事を思ひ出す。最近の沙翁もの映畫を評論するに先だち、私が倫敦のステイヂで見た沙翁物を列記してみる

クウイーンズ座で「ハムレツト」をみた。これはオウルド ヴイクタムバ氏の上演したもので、特筆すべき事はヂヨン ギルグドのハムレツトである。この俳優の名こそ今日記憶すべき名の一つである。次に「オセロウ」をみた。ムア人なるオセロウを演じたのは誰れあらう賞にボールローブスンである。この演技者ロウブスンは今日では日本に於ても知つてゐる人がかなりあらう。それは彼の演じた映畫「コンゴウ部隊」等がは近年日本にも来たからである。なほイアーゴウの型をスイビル ローレンスダイ、ヂズデモウナをベヂ アシルクロフトがつとめた。次にかのウーリ座で「リチアド三世」をみた特記すべきはベイリアル ホロウハイとナンスイ ブライスとの名演技である。次にヘイマーケツト座でみた「ハムレツト」は型一九三二年のザレツト」は型一九三二年のザ ヂヨン スイヂとともに賞に値らしいものであつた文学的リのグレイト オールスタート ガーストであつたゴドフレ タールのハムレツトとアフエイ カムブトンのオフエリアは傳統と型とに百発せず、彼女の魂智と努力によつて沙翁のヴーリエツトを捕へて彼女自身のヴーリエツトを表はしてゐると評されてゐる

「おゝ、ロウミオウどの、可愛しう思うて下さるが賞なら其通り誠実に言うて下されそれとも飽り厚軽う手に入つたとお思ひなさるやうなら、彼と怖い鞭をして言ふ言葉りなされても」……賞にバルコンの上下の二人の対話こそラグスイーンの絶技であらうこの映畫製作中のこつけいな話は姦風貪へ〜の役人がこの映畫の撮影のために監督し

ライーリア ホロウハイの父王の肖像は記憶に残つてゐる次にオウルド ヴイタ座に於てのヂヨン ギルグドの「リア王」ナンスイ ブライスのコオーナアン座に於ての「以尺報尺」ヒズ マヂエスチ座の「ヂユーリアス スイヂ」をみた。ハーヂングのスイヂ タールのアントウニアスの外ホロウハイやアシエ等の俳優の名演技は倫敦をわきたいたものであつた。最近の倫敦劇界の大きな話題となつたのはエウー座に於けるギルグドの「ハムレツト」と、更に近くは興座に於ての「ロウミオウとヂユーリエツト」である。これにもギルグドがベヂ アシルクロフトやイーデス エヴアンスやローレンス オリヴイエと共に出演してゐる。とりわけギルグドとホリヴイアの二役ボロウミオウとヤーキムーレショウの二役を演ずることによつて一層倫敦劇界を沸騰せしめたのであつた

よつて、いかにウオーナブラザズがこの映畫に力をいれたものかを知るに難くない。最も偉大にして野心的映畫は賞に百高弗として賞賛し、驚嘆に値する興味をひいたものであつた。そも〜沙翁物の映畫化の一般傾向や特にこの「真夏の夜の夢」が如何なる出来栄であるかは既に述べる事として、約四十の沙翁物の中では、この「恋愛な喜劇」は最も映畫化して輸出なる喜劇」は最も映畫化し得るものであることは確かである。この夢幻的喜劇の舞台の如きは、夏の野外劇として最もふさはしいものである。約三百四十年前に沙翁がパツク（ヘキ ルーム絞す）の口を通して不朽の言葉「人間て者は、何といふ馬鹿でせう」三幕二場）といはしめた時、ホリツドは目のてりつける砂漠であつた。そこに今日五百ラインハートが蔦をつくり、妖精を活躍せしめた。沙翁が言葉でファンタスイヂをもつて大きな夢を描きあげた。実にそれはたと言ふだけであつた。ラインハートは今日それを具体化してみせてくれた。沙翁がもし今日あらば、彼が三百数十年の昔、英国で夢みたよりもつと〜多くのものがホリツドにあることに驚いたであらう。「必要は発明の母」「ホリウドは デイセプレアンの楽園」といはれてゐるが舞台内につくられた森、妖精をみる時、この映画の魅惑に縛られたる魅力の大なるに驚かざるを得ないことであつたらう。出演者は英国俳優中特に一般の興味あるのは御存知のキアグ氏白みも、「ギアングスタズ さよなら」と題して演じてゐる。「Gメン」「暗闇の市長」「フクトライト パレイド」等のキアグが沙翁の優秀として出演するので彼自身もよほどくすぐつたい感がしたのであつたらう。「夏はキアグと沙翁とがよく〜マクスしさうにみえない事を知つてゐます。私は沙翁物のアクタとみえませんが。それともみえませうか」と言われてゐる。しかし彼はブロツムラインハートによつてボトムの役にえらばれた時ほど座中ブラウドに感じた事はないといつた。なほ彼が沙翁物に出るといふ事は食同で考へる程奇異ではない。なぜなれば彼が舞台に立つた最初の役は賞に第八王朝の「ヴェニスの商人」に於てであつたのである。嘗ひにボトムとしてのキアグの演技は既にグラド ウアータと評されてゐるまてこの映畫の倫敦アデルフイ座に於ける上演は昨年の十月九日であつた。意外なる此評はかんばしくなかつた。勝利と失敗の試合と評された。勝利はリタクの結果、森の場面、メンデルゾーンの美しい作楽伴奏が、スクリーンにもたらされた巧妙さに存してゐる。失敗は沙翁創作の全体的な色彩の極めて薄い点に存してゐる。ボトムは彼が恋人の下げいをしたり、公爵の前で恋人を見受けるのであつたが、ボトムの演技は既にグラド ウアータと評されてゐる。ボトムとしての全体的な色彩の極めて薄い点に存してゐる。失敗は沙翁創作の全体的な色彩の極めて薄い点に存してゐる。ボトムは彼が恋人の下げいをしたり、公爵の前で恋人を見受けるのであつたが、

佛蘭西文學の一般的特質

松尾正路

「一九二一年に於ける佛蘭西の小說に關する覺書」の中で、ポオル・ブールジェは、小說の發達の要素が調和にあることを述べ、佛蘭西の小說が他國の小說に比して優れてゐる點は、そのデッサンの明瞭さにあると說いてゐる。バルザックのリージョナイグランデ、フロオベルのボヴァリイ夫人、ゾラのゼルーナアルゼに見る調和の明瞭性はウイルヘルム・マイスターにもダビイド・コパアフイルドにもアンナカレニナにも無い、と云つてゐる。そしてこれが、トルストイの敗因だ、とも云つてゐる。

ブールジェの言葉は歐洲大戰、後ダダイスムやペルクソニスムの影響を受けた無政府的な感覺文學の氣運に對する古典主義の勃興を暗示してゐるのではないか。思ふにルクソオの破壞の叫びがジルネーヴであつた如く、ダダイスムの發生地が同じジルネーヴであり、ルクソオ人の仕業であつたことも興味に富む。ジルネーヴ人の手に成つた時には異新な形式となつてゐる。ジュリヤンバンダに從へば、現代佛蘭西文學に害悪的傾向と思想性の缺乏をもたらした罪はベルグソンにあるらしいが、その明瞭性に關して次の樣に語つてゐる。

佛蘭西では、一人の作者が十二、三人の他の作者や同盟や仲間達によつてしか理解出來ないやうな事物を書いて誇るといふやうなことは決してあり得ない。吾々は特殊な作品的所産といふものを持つてはゐない。デモクラシイなる言葉の最も高度な意味に於て吾々は、明瞭性がデモクラシイの本質であると云ふことが出來る。哲學に就いてだけ語るならば、哲學と一般公衆と為語體するあの野蠻な專門的用語をもつて哲學を論じたのは佛蘭西ではない。デカルトを始めとして、佛蘭西の最も偉大な思想家達は如何に思想が深く微妙であらうとも、佛蘭西人の言葉によつて表現され得ないやうな思想はあり得ないと考へてゐた——。

明瞭性がデモクラシイの本質である、といふベルグソンの言葉は、ポール・モオランが「金羊皮」の中に、皆度とデモクラシイとを關聯させてゐるのを思ひ起させる。

カトリンヌメイヨは、印度に關する彼の書物の中で、英國人が印度の發展門の組織にホケケエを敢へて認めなくなる苦心を持つてゐることを語つてゐる。そしてこの貴族の組織は、上流階級に屬する者が佛蘭西に回現した時、それは全く新しい詩の發祥であつた。一七六九年代に出版した佛蘭西の組織人は、殆どすべてヤングの「夜」に刺激し、憐るべき影響を與へてゐるが、このやうな感動は、佛蘭西にとつて換して言へば、しいものではなかつた。何故なら、人生の苦しみに對してさへ、絵畫的な感覺よりも感覺と發突を後らしかける佛蘭西的精神にこれほど強いものはないからである。このやうな絵畫的な趣味も今日では全く忘れられ佛蘭西では、この作者の名前さへ記憶されてゐない——

グールモンに從へば、佛蘭西のロマンチスムが外國の影響によつて發生したといふ點に關して、ブールジェは、文明の概念に科學的概念を結びつけるのは極めて難である。現代の佛蘭西の科學主義の中で、十九世紀の科學主義に比べられた作家は、ペールジェの他にアンドレ・ジイドを數へることが出來る。マラルメの死の門下生であつたかれは如何にソルボンヌの講座で講義されようとも、日本といふ特質環境を度外視しては殆ど手掘るに由なき文學である以上、佛語は永久に世界の文學とはなり得ない。日本佛語の影響によつて現れた佛蘭西の佛語運動も佛蘭西人の興味の閃きを發ふ器となつてゐる彼等のハイカイの如きなるものは佛蘭西を知らないといふことが吾々の理解に何の支障をもたらさない程に吾々を微笑させるのである。

吾々は日本精神とか、日本魂とか稱へる時にも、若しそれが、日本だけのもの、外國にはないといふ、たゞそれだけの誇りであるならば、貧弱、野蛮な、民族意識たるに過ぎぬ日本精神は、世界の謚をもうなづかせるものでなければならぬ、人類の恵れた知慧をことさらに貶下させるやうな民族主義から、吾々は何をも學ぶ必要はない。吾々は、吾々の日本主義や日本精神をもつと大切にしなければならない

かつて同僚の或る教授は、愛國主義はむしろオプチミスであるといふ僕の意見をもつたところ、教授は、僕の言葉が全く不可解であるらしくそも〳〵それは何の意味かと驚き且つ怪しんでをられた。私の意味する愛國主義は、純粹に知的な行爲であつて、グールジェの哲學の仕方である。モンテーニュやアナトール・フランスのあの靜かな思想である。同じ日本人であつても、各人の見地に對する意識や嗜好の差によつて、夫々のコミュニオンをともなふ事實は、走つてはならないのだと答へてゐる。このやうな傳統が「金羊皮」はデモクラシイである」といふ陛れた意味を持つてゐることを、彼女達は氣づかないのだ——

共和國佛蘭西が、進歩の點で最も優れた飛行技術を持つてゐるのも不思議ではない。そして佛蘭西の悪犬家がドストイエフスキーに心理小說家の名を與へようとしない理由も、このやうなデモクラシイの理論のうちに含まれてゐる。ドストイエフスキーは、佛蘭西の文學が目覺的であるといふ見解は、決して三木清の發明ではない。佛蘭西文學は、所謂ハムレット型の人物を描かないことを原則としてゐる。スウイフトの夜の下では生れないのだ。バルザックの無神論者も、プールゴエの無神論者も、つねに小市民に限られてゐる。佛蘭西人のペレーズや皮肉は何處かで上機嫌を思はせる。愛憎者的性格は、佛蘭西人の興味の對象とはなり得ない。佛蘭西人の社交性とは、特に若い婦人達に歓迎される理由は英國婦人の哲學者達が、前世紀は來獎つて來た英國府とバイロンの風俗の爲であつた。「佛蘭西に於ける英文學」の中で、グールモンは次の如く語つてゐる

ヤングの「夜」(Night Thoughts)が佛蘭西に回現した時、それは全く新しい詩の發祥であつた。一七六九年代に出版した佛蘭西の組織人は、殆どすべてヤングの「夜」に刺激し、憐るべき影響を與へてゐるが、このやうな感動は、佛蘭西にとつて換して言へば、しいものではなかつた。何故なら、人生の苦しみに對してさへ、絵畫的な感覺よりも感覺と發突を後らしかける佛蘭西的精神にこれほど強いものはないからである。このやうな絵畫的な趣味も今日では全く忘れられ佛蘭西では、この作者の名前さへ記憶されてゐない——

グールモンに從へば、佛蘭西のロマンチスムが外國の影響によつて發生したといふ點に關して、ブールジェは、文明の概念に科學的概念を結びつけるのは極めて難である。現代の佛蘭西の科學主義の中で、十九世紀の科學主義に比べられた作家は、ペールジェの他にアンドレ・ジイドを數へることが出來る。マラルメの死の門下生であつたかれは如何にソルボンヌの講座で講義されようとも、日本といふ特質環境を度外視しては殆ど手掘るに由なき文學である以上、佛語は永久に世界の文學とはなり得ない。日本佛語の影響によつて現れた佛蘭西の佛語運動も佛蘭西人の興味の閃きを發ふ器となつてゐる彼等のハイカイの如きなるものは佛蘭西を知らないといふことが吾々の理解に何の支障をもたらさない程に吾々を微笑させるのである。

吾々は日本精神とか、日本魂とか稱へる時にも、若しそれが、日本だけのもの、外國にはないといふ、たゞそれだけの誇りであるならば、貧弱、野蛮な、民族意識たるに過ぎぬ日本精神は、世界の謚をもうなづかせるものでなければならぬ、人類の恵れた知慧をことさらに貶下させるやうな民族主義から、吾々は何をも學ぶ必要はない。吾々は、吾々の日本主義や日本精神をもつと大切にしなければならない

かつて同僚の或る教授は、愛國主義はむしろオプチミスであるといふ僕の意見をもつたところ、教授は、僕の言葉が全く不可解であるらしくそも〳〵それは何の意味かと驚き且つ怪しんでをられた。私の意味する愛國主義は、純粹に知的な行爲であつて、グールジェの哲學の仕方である。モンテーニュやアナトール・フランスのあの靜かな思想である。同じ日本人であつても、各人の見地に對する意識や嗜好の差によつて、夫々のコミュニオンをともなふ事實は、彼等の趣味である。彼の理論に來てメタメの挑れに投じたのはこの點である」

ところで、ブルゲーネフは佛蘭西的な文學人であつたが、ドストイエフスキーの尚賞を買ひ、ロシヤ主義の青年から敬遠されたのである。ブルゲーネフの性格の弱さは、彼の手の現出が特に普通の人よりは小さかつたといふ肉體的な感覺の他に、彼が如何に文學人であつたかを物語つてゐる。文學、特に戯曲に對する感覺的な吸収の時間は、暗どその間に、つて佛蘭西に於ても明はれたことがある。ルクソオの「ダランベールへの手紙」がそれである。しこの事實は、ルクソオがジルネーヴ人であり、佛蘭西人よりもジルネーヴの國に接ぎた人間であることを思へば、ギリシャテンの文化を源泉とする佛蘭西的精神からは、全く例外として取扱ふのが自然である

上記のブールジェの言葉は歐洲大戰、後ダダイスムやペルクソニスムの影響を受けた無政府的な感覺文學の氣運に對する古典主義の勃興を暗示してゐるのではないか。思ふにルクソオの破壞の叫びがジルネーヴであつた如く、ダダイスムの發生地が同じジルネーヴであり、ルクソオ人の仕業であつたことも興味に富む。ジルネーヴ人の手に成つた時には異新な形式となつてゐる。ジュリヤンバンダに從へば、現代佛蘭西文學に害悪的傾向と思想性の缺乏をもたらした罪はベルグソンにあるらしいが、その明瞭性に關して次の樣に語つてゐる。

佛蘭西では、一人の作者が十二、三人の他の作者や同盟や仲間達によつてしか理解出來ないやうな事物を書いて誇るといふやうなことは決してあり得ない。吾々は特殊な作品的所産といふものを持つてはゐない。デモクラシイなる言葉の最も高度な意味に於て吾々は、明瞭性がデモクラシイの本質であると云ふことが出來る。哲學に就いてだけ語るならば、哲學と一般公衆と為語體するあの野蠻な專門的用語をもつて哲學を論じたのは佛蘭西ではない。デカルトを始めとして、佛蘭西の最も偉大な思想家達は如何に思想が深く微妙であらうとも、佛蘭西人の言葉によつて表現され得ないやうな思想はあり得ないと考へてゐた——。

明瞭性がデモクラシイの本質である、といふベルグソンの言葉は、ポール・モオランが「金羊皮」の中に、皆度とデモクラシイとを關聯させてゐるのを思ひ起させる。

カトリンヌメイヨは、印度に關する彼の書物の中で、英國人が印度の發展門の組織にホケケエを敢へて認めなくなる苦心を持つてゐることを語つてゐる。そしてこの貴族の組織は、上流階級に屬する者が佛蘭西に回現した時、それは全く新しい詩の發祥であつた。一七六九年代に出版した佛蘭西の組織人は、殆どすべてヤングの「夜」に刺激し、憐るべき影響を與へてゐるが、このやうな感動は、佛蘭西にとつて換して言へば、しいものではなかつた。何故なら、人生の苦しみに對してさへ、絵畫的な感覺よりも感覺と發突を後らしかける佛蘭西的精神にこれほど強いものはないからである。このやうな絵畫的な趣味も今日では全く忘れられ佛蘭西では、この作者の名前さへ記憶されてゐない——

グールモンに從へば、佛蘭西のロマンチスムが外國の影響によつて發生したといふ點に關して、ブールジェは、文明の概念に科學的概念を結びつけるのは極めて難である。現代の佛蘭西の科學主義の中で、十九世紀の科學主義に比べられた作家は、ペールジェの他にアンドレ・ジイドを數へることが出來る。マラルメの死の門下生であつたかれは如何にソルボンヌの講座で講義されようとも、日本といふ特質環境を度外視しては殆ど手掘るに由なき文學である以上、佛語は永久に世界の文學とはなり得ない。日本佛語の影響によつて現れた佛蘭西の佛語運動も佛蘭西人の興味の閃きを發ふ器となつてゐる彼等のハイカイの如きなるものは佛蘭西を知らないといふことが吾々の理解に何の支障をもたらさない程に吾々を微笑させるのである。

吾々は日本精神とか、日本魂とか稱へる時にも、若しそれが、日本だけのもの、外國にはないといふ、たゞそれだけの誇りであるならば、貧弱、野蛮な、民族意識たるに過ぎぬ日本精神は、世界の謚をもうなづかせるものでなければならぬ、人類の恵れた知慧をことさらに貶下させるやうな民族主義から、吾々は何をも學ぶ必要はない。吾々は、吾々の日本主義や日本精神をもつと大切にしなければならない

かつて同僚の或る教授は、愛國主義はむしろオプチミスであるといふ僕の意見をもつたところ、教授は、僕の言葉が全く不可解であるらしくそも〳〵それは何の意味かと驚き且つ怪しんでをられた。私の意味する愛國主義は、純粹に知的な行爲であつて、グールジェの哲學の仕方である。モンテーニュやアナトール・フランスのあの靜かな思想である。同じ日本人であつても、各人の見地に對する意識や嗜好の差によつて、夫々のコミュニオンをともなふ事實は、彼等の趣味である。彼の理論に來てメタメの挑れに投じたのはこの點である」

ところで、ブルゲーネフは佛蘭西的な文學人であつたが、ドストイエフスキーの尚賞を買ひ、ロシヤ主義の青年から敬遠されたのである。ブルゲーネフの性格の弱さは、彼の手の現出が特に普通の人よりは小さかつたといふ肉體的な感覺の他に、彼が如何に文學人であつたかを物語つてゐる。文學、特に戯曲に對する感覺的な吸収の時間は、ぴは

學園再認識論

燦たり三千の卒業生

卜部岩太郎

見る。學校は教師の爲めに存在するものでないのは今更言ふまでもないが、これと反對に校舍の爲めに存在するといふ言葉を聞くが、これは一面尤もの點で面も教育設備を加へたければ施設設備の爲めの設備なりを來すもので教育上無益なる弊害を生ずる。學校はあくまで國家の爲めの社會の爲めに設立せられ存在するものであるとの觀念すべきである。少くも我が帝國に於ける學校は凡て國家の一部たる學校を一定の目的の下に教育して社會有用の材たらしめ、以て國家の發展に寄與するものでなくてはならぬ。學校の方針乃至教育の理論及方法も畢くこの點より組み出されなければならぬ。他も教師及學生の師弟の者の自覺に待つて校長の事業を自負すべきものでもない、所謂學校の價値は有形の卒業生が國家に對して社會的に貢獻する點と質と量とに俟つて決せらるべきであると思惟する。

かゝる見解の下に創立以來我が高等學校が社會に送り出した卒業生に就て一瞥しようと思ふ。然し全は全の見聞せる事實を基礎に陳べる止まり何等統計がましい豆腐屋的の調査を用ふることは全の低でない。何となれば實なれば我輩別本の調査を要せず、既すれば只に嘱するの線あるからである

一、卒業生の量

大正三年第一回卒業生は僅かに五〇名に過ぎずしものが年次を追うて本科數的に增加し本年第二十三回卒業生一八一名を加へれば無慮三一〇九名を算する。若し第一學部に屬する綜校と第二學部に屬する綜校とを一千五百名と假算すれば二學部に相當し一學部を構成するに足る。我が社會に於ては、第一戰に立つて在國の國力を保つ、ある譯である。當面たる綜合學問本體なりといはざるを得ぬ。

若し夫れ我學の高踏無窮に對して北方文化の開拓に與ふ者約一千を數へ、國家として中央產業界に飛び込んで發展するものの數實に五百、一定年月同じ地區に身を投じ、一定年月同じ地區に身を投じたる國際相互又は國際的に於ては一緩急ふべからざる兄弟が生ずるは自然である、故に知る學校でも所謂學部と稱するものがある、長く管理を共にし、共存共榮を同じ相互に提携し、共榮を同じ、共榮を同じ、共榮を同じ

學生論斷片

中野清一

I. THE 25TH ANNIVERSARY

I can remember when I was an undergraduate that my College celebrated its 500th Anniversary. It was a time for looking back; a time for praising famous men, all dead, and nearly all forgotten. I can remember, too, that the President of the Undergraduates' Society of the College was an American, and he it was who spoke on behalf of the students. He was not English and his ancestors had been German, but no-one thought it out of place that he should have been selected on such an occasion to speak on behalf of a body of English undergraduates in an English University.

A 25th Anniversary, on the other hand, would seem to be rather a time for looking forward. True it may be that in those 25 years Japan has seen nearly as many changes as an Oxford College can have seen in 500, but 25 years is not even a generation. Even the first of our graduates cannot yet have reached anything like the heights to which he may possibly yet climb. It would seem therefore that the duty of everyone is to look forward. I should like to see a celebration which treated the past with the smallest possible amount of consideration, and bent its eyes on the future. If there were to be a presentation album, I should like it to contain, not photographs of the School as it looks to-day, but imaginative pictures of what it has got to be made to look like in another 25 years time. A good many of those who graduated in the first year of the School's graduation records will be alive to see what it looks like after another 25 years. They can see the realisation of my hopes that they may build.

We may say that, whilst a boy is still a student, he can do very little for his school. Everything must come to him from his teachers; no matter how many great geniuses there may be lurking in the School at this moment, they are of almost no importance. The reputation and the power of the school lies with its teachers and with its graduates. The power of the school to provide teaching of the highest possible class—which is the only justification that a School has for existence—cannot be materially increased by the students of the moment. The idea in the mind of everyone present at these celebrations seems, therefore, to me lest if it is directed solely towards the object of making it possible for the School to continue to attract the finest teachers that the country can provide. And, having attracted them, the School ought to be able to make it possible for those men—and, who knows(?) for we are speaking of the future, women—to keep themselves in the finest possible condition for teaching.

May we then look again into the future, and see a vision of the Otaru College of Commerce attracting by its fame not only the students of Hokkaido or even of all Japan, nor even of the entire Empire of Japan alone? May we look forward to the 50th or the 100th Anniversary and feel that there may be a President of the Students' Society from China, Siam, India, anywhere, attracted to the College and made part of it by a tradition that will have grown to be international?

II. FROM MY STUDY ROOM

When one has promised to give a series of lectures on post-war literature it becomes, unhappily, urgently necessary to read the post-war novelists. When one realises that the time at which one promised to give the lectures is drawing uncomfortably close, it becomes painfully essential to read them all the time and to read almost nothing else. And outside the weather is just not the sort of weather that invites one to remain indoors for a second longer than is unavoidable. And so one turns from the pain that inspired D. H. Lawrence in the hope of finding something a little more in agreement with one's mood in, perhaps, Aldous Huxley. Only to turn to hair-raising and probably accurate descriptions of an almost incredibly unpleasant world of the future. Who else is there? Virginia Woolf? A female bore of the most virulent type on a summer's evening. Then Richard Arlington? No; he's too angry, and one refuses to contemplate anger on an evening like this. The last newspaper from home, then? But one is supposed to be working, and if that newspaper is picked up and opened—on an evening like this—it will inevitably open itself at the cricket news. Strong-mindedly, then, let us force it to open at the news of the literary world or at the political reports.... A mistake. There is nothing here that ought to be read on a June evening. Mussolini's threats, Hitler's new moves. What will the Communists do in France. One doesn't want to know; not now at any rate. One wants to see those cricket scores and be back in a cricket field. But will there be any such going back? Or perhaps in the end it is these new moves and these threats that will have the last word and force one back, a potential hero. A potential name on perhaps one dozen assorted war memorials. Died in action. Probably of trench feet or some new kind of gas. But that might be better than some other things; better, for example, than Aldous Huxley's Brave New World that ten minutes ago was seeming so probable and likely to be the outcome of everything. Better than to live the sort of life that D. H. Lawrence permitted most of his heroes to go on living. Better than to be as angry as Mr. Aldington with so many things with which it is really quite out of the question to remain angry and go on not committing suicide.

But all this started from the fact that the world outside the study room was too pleasant for one to remain inside it seriously working. There seems to be, then, some logical absurdity in surrounding oneself with all these horrors inside when it requires only to take three steps and open one door to get outside. Strong-minded to continue studying, did we say? Strong-minded not to stop thinking? Not for one second. Strong-minded to go out; to leave the dissatisfaction of these books and this paper. Weak-minded to stay here a moment longer than is required to take those three steps and to open that one door.

III. WHAT I WANT FOR MY COUNTRY

In former times it used to be said that the difference between the patriotism of the Frenchman and of the Spaniard was to be found in the fact that the Spaniard knew that his country was the best in the world and it never entered his head to suppose that anyone else could possibly hold any other opinion. As result he did not take any sort of action whatever to prove that his country was as good as it seemed to him to be. The Frenchman, on the other hand, woke up in the morning with the realisation of his country's greatness daily thrust upon him. And he kept into action to set about proving to everybody else with whom he might come into contact that his country was in fact as great as he supposed it to be.

The ordinary Englishman of to-day feels pretty much as the ancient Spaniard felt. It does not occur to him to suppose that there could possibly lurk in the minds of Japanese, German, or French people any suspicion contrary to the fundamental fact of his country's inferiority to England. The result is that very often when the Englishman is going out of his way to be kind to the foreigner he is really trying to express his deep sympathy with that person's misfortune in not being born British. The politeness and kindness of the London policeman is famous. Particularly famous is his consideration and help offered to the foreigner. This kind of thing is in all probability based on his deep sympathy with the foreigner's crushing misfortune in not being British—or rather English, for your true Londoner has little but dislike for the Scotsman or the Welshman.

To the ordinary Englishman it seldom occurs to think that the Indian or the African negro should consider himself as anything else but supremely lucky in his enjoyment of the advantages of a connection, however humble, with the name and fame of England. That is one reason why the Englishman seldom takes the possibility of war as being really serious until it has broken out. It is the reason why he invariably blames the wretched statesmen who have the misfortune to be concerned with the opening of the war. He cannot believe that anyone else should really have any proper cause of conflict with him who is so perfect. It is the reason why we blame our King George III for the loss of the American colonies. We cannot bring ourselves to suppose, what is in fact the truth, that what the American revolted against was something fundamentally unpleasant in the English nature—the total inability to think of himself as anything else but a supremely fine fellow. The basic factor in England's relations with other powers is her fatal tendency towards condescension, and if I had the power of achieving the realisation of any one single wish with regard to my country it would be that this twist of the national mind should be eliminated.

— FIRMINGER —

新刊紹介

中山庚子男氏の新著を語る

西川正巳

昨年七月第中央図書館に入ると間もなく発行された北海道の中山庚子男氏の著書を受けた所に十年前の昔、「中山庚子」と挑ぶされた同氏の鼻下の髭が先づ目に飛つて来た。その後は二時の間、その人と面会する機会を得て時の過ぎるを忘れ、時を惜しむ程度に到して到底の過ぎるを知らず、一種の興味を感じてゐるのではなく、実に社会的に有益な問題を提出してゐるのである。その中にもその人が何も好んでそうしてゐるのではなく、実に社会的に有益な問題を提出してゐるのであるとの感じを抱いてゐるのである。

[illegible]

小樽高等商業學校 學術研究基金申込口數 拂込額並ニ未收入額調

創立二十五周年記念（昭和十一年六月二九日現在）

申込口數	申込金額	拂込額	未收額	氏名	備考
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

小樽高等商業學校 學術助成基金申込口數 拂込額並ニ未收入額調

創立廿五周年記念（昭和十一年六月廿九日現在）

申込口數	申込金額	拂込額	未收額	氏名	備考
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

金品寄贈
大正三年
川上久臣 勤先紳奈川縣会津町日本製鋼所横須賀工場
大正六年
[illegible]
大正七年
[illegible]
大正八年
[illegible]
大正九年
[illegible]
大正十年
[illegible]
大正十二年
[illegible]
大正十三年
[illegible]
大正十五年
[illegible]
昭和二年
[illegible]

回顧談に花咲く「先輩座談會」

六月六日午後七時半　於北海ホテル

出席者
作発生、吉栄地校長、作前校長、中村発生、手塚発生、飯川文三、松田新、佐野善吉、盛田礼、田中正一の諸氏、太田、亀田、國島、梅原、岡島、平木、米川（順序不同）

松田　此度母校創立二十五周年を迎へますにつきまして同窓会と興基年北海の同窓会とが共同催の祝賀会を挙げましました。基年北海の同窓会の方からは、即席下さいまして有難ふ存じます、どうか懇話会に花を咲かせて意義深い会合である様にしたいと思つて居ります、では盛田君、進行係の方を願ひます

太田　第一期の飯川さんから當時の學生氣質をお聞ひします

飯川　第一期生でした。文人國保はインチメイトでした。間から見ても好ましい位調和を成してゐました

吉栄地　寄宿舎に入つたのは五月二日でした。今の雨天練習場だがれ、六つに仕切つて寝ました

飯川　盛田、藤田中佐でした

吉栄地　四十五年三月、百四で第二寄宿舎、それから第一寄宿舎の順で、後藤新平の後方の一軒長屋が第三寄宿舎

一同　あんなところですか

（それから寄宿舎の話、この所略し掲載）

一同　よく覚えてますれ

飯川　入つた時七十二名、寄宿舎に入つたのは二十七八名二年になつたのは五十何名だれ

吉栄地　引っ越しの時押入れを枕として見たら例があつたと思ふれ？ビールびんばかりだつたが

飯川　校長御自身に見廻られてたしなめられて

吉栄地　裏山でメートル駆げてて鶏が山たたんてさわいだりしたものだ

作　まあ當時の學生氣質を知るにはどんな學生が入つてたかと云ふ事を知る事が必要だ

吉栄地　變り種が多かつたれ

松田　當時小樽に「神戸新聞」があつてとても面白い事がありますよ。一寸所々読んで見ませうか、書き抜きがありますから

松田（松田氏読む）「格闘会の大荒林と呼ばれたる雪に妹はれた一緑の山を背景にして立る、鉄グローンカラーあざやかな紅光は柔物、大読賞と云ひ、紙石は未遂事件一の高等商業校たるに恥

所が――直ぐ「ドウダイノ」と聞かやつた賞に名無酬だつたれ。これが即つてたんだから愉快な賞に利いた

手塚　一緑の入学者には強制中は居りませんでしたか

飯川　居なかつたれ二緑は中止だつた、ずつと後だつた

松田　は律軍への道でゴンの時が通る後だつたよ

吉栄地　四十四年三月二十九日、第一回の入学試験日でした。陸軍の日でした、受験者は相當の年齢でした。僕は文部省の試験場でした。それで受験者を出した。それで受験者は一番でした、一番が落ちてはと思ひましたよ。國松先生に、藤田といふ豊御中佐の試験は四番當時の試験所から藤田先生に来てゐました。受験者百五十人、でも七十二人入つた教授と地理の「基石」が出た。後で聞いて見ると陸石と間違へた人がある。地球の引力により天より降る石、現に東京博物館に之を展示とやつたんだ。隕石を見る官報が伸びないんです、鉄鉱物は見せて貰ひました。それから後に通知が来ました。あの頃の事を云へば明治四十四年八月行幸があつて諸所がよくなつたのです

吉栄地　その行幸道路が雨水の館、地球儀だつたわけです

太田　その當時の學生はやつぱり江南日でしたか

松田　授業は前日に受けました。寝室に感ずる風でした

―風呂といふのでせう、もつと感謝があつた

吉栄地　あの當時の學生は學校外でもよく本を買つて読んだ

飯川　講演録は大阪西五郎は もつてゐた

吉栄地　本を買つたのは手塚君あたりまでですれ

吉栄地　どうも今の學生は本を買ふ金を惜しむようになつたのは最近日ですれ

作　その當時の吉栄地さんや國松さんの部は白かつた

吉栄地　作さんにも励ました愛があつた

飯川　袋を携げて學校へ行つたのは吉栄地先生でした

作　先生は鞄、鞄をタダイで大校に歩いたものでした

吉栄地　それは國田城の前の宮崎官吉學にたつたら、位人身を練めた人が行くと云はれたものだ

作　あの當時の吉栄地さんと國松さんは自轉の学生とは新

の如き感といふ感がしました

吉栄地　鉄道、大西、竹谷鉄先生が直接行幸に合流してゐました

松田　宇佐美の下宿は五小川が開い鈴木鉄道君の戦合學は食に入つたものだつた

吉栄地　その當時大西先生や國松先生が居られた

作　其當時の寄るしき現象は先生と生徒とが接近して親しかつた事だ

吉栄地　それはあれ其来めつきり目になつたれ

松田　それは年齢に接近して居たのも一つの理由です

吉栄地　減る生徒は減員到に行つた会がなくなつたから私んとこへ十一時頃飯を食ひにやつて来て話先に酒をくれと云つた、尤も数の少いせいもあつたんです

松田　化物の出た寄宿舎があつたではないですか

吉栄地　それは君、第三寄宿舎の前の井は料理屋でそれが病院になり寄宿舎が自殺した跡があつたんだ。それを寄宿舎にしたんだから、出てるんだと、四畳半や九畳があつたんだ、自殺した部屋に上がる四畳半が居て化物の正体見とやけんと寄宿舎が居たよ

松田　手塚さんが入つた時だれ化物騒動のあつたのは

手塚　そうですれ

吉栄地　その晩吉川虎次君が第一になされ、南雲事件が実際新聞には出ずまい、れたと聞いた。それから寄宿舎が化物騒動でやつて来れ一時大騒ぎだつた

作　あの建物は建つて居る

松田　もう無いんでせう

太田　さつき今の學生は本を買はぬがあの當時の學生が本を買つたと云はれましたが級学生が無い筈ではなかつたですか

作　スキーもなかつたし

吉栄地　何んにもなかれ、スキーはなく今の様なキネマもなし、高岡ビヤホールがあつたが僅は行かないのは、行つたら學生が骨折るので授業妨害になると思つて行かない事にした

金栄　未だなも先生が来たもおどもせるんですかれ

作　授業さんは遠藤をなもつて授業さんは小樽は鉄道の所と云はせる様に義さん内地にやもれず、小樽はよいことだよいとこだと東京に云ふてをられた

吉栄地　大正七年の秋一度遠藤さんと一緒に行つた時、小樽の多は鉄ですれと鉄が云つたら只の一度ウンと云はれた

飯川　スキーは小樽高商が一番早いですこれを忘れて貰ひたくないですよ。明治四十四年二月に高田に吉栄地先生がスキーを内地に習ひに行かれオーストリヤのレルヒ中佐にならひスキーを三年もつて帰られ我々に教へられたのです。その新聞が

寫真説明

向ツテ右ヨリ　松田　盛田　米川　平木　岡島　梅原　國島　亀田　太田　田中　中村　手塚　作　吉栄地　佐野　飯川　盛田　藤田　田中　中村

廿五周年を契機に
各部座談會開かる
更に一生面の轉換を期せん

座談會出席者氏名
手塚教授
○編部代表（蔵相省略）牧野、善張寺（總務）岡田（議演部）菅原（競技部）（野球部）清井（水泳部）橋本（ラグビー部）西口（スキー部）三村（蹴球部）（剣道部）木村（弓道部）中山（洋書部）（柔道、外語部代表缺席）
○應援團　清井、中山、仮坂
○各運部　太田、細田、岡島、梅原、岡島、平木、若月、米川

◇校友會各部現狀

太田（編部）本校は五周年を迎えるに當り、部員の一大奮起の要望とする様に今晩集まって戴きました。各部運事の皆様は大きな見地に立つて各部を指導して下さい。我が部は今年は特別に強行軍を敢行します。では先づ各部の現狀を伺ひます

清井（水泳）我部の部は多大の費用をかけて東北一といはれる立派な屋内プールを造つて貰ひましたが、水の様にプールはあの通りで、まだ固つてゐます。六月下旬までには大體完成の豫定になつてゐますが、兎に角大気のいゝのに出だけは練習も出来ず全く困つて居ります

太田　水泳全然不可能ですか

清井　水泳全然不可能です。それから新入部員にかなり優秀なのが入りまして現在十四名の部員を擁してゐます。豫選戦は陸軍練習の事情で今年は武合を出来ないかも知れないと思つてます

岡田　學生一般の水泳に就てはどういふ方針をとる心算ですか

清井　それは大谷部長の管理規定によるだらうと思はれますが、まだ決定を見てゐません。多分コースの新設等が時間制によるんでせう

手塚　あのプール設置の賛成も多少使用を制限としたものだが多の使用不可能とすればあれだけの設備は少し大きすぎた様ですね。もう少し縮詰して見るべきだつたかも知れない

清井　そうですれ……

太田　次は弓道部の方

木村（弓道）部員のため多は控へ、場の二階を使つてゐます。今年は弓の道場の除雪に相當費が割れました。優秀な手二、三名入りました

岡島　部員外の練習はいゝと思ひますが現在は？

木村　まあ選手の練習を妨げない程度ならいゝと思ひます。それは後で運動部公開にゆづりまして次……

牧野（蹴球）二十五周年事業に關する指導は四人の部員で練力今年のみの校友會で（略）無責任を呼べて只今編本的なものをやりたいと思ります

岡島　その編本的具體案とは

牧野　プール建設事業といつたものよりは編成編本が面に力を注ぎたいと思ひます

太田　理事部度部等もその中に入りますか？

牧野　そんな事よりも、もつと大きなもの即ち精神的方面に發展したいと思つてます

岡島　その精神的方面とは

牧野　そう聞かれると一寸……僕なものよりは編成編本が面に力を注ぎたいと思ひます

太田　では牧野さんの前に順様して次に進みます

古澤（剣道）今年の練習は部員十六名で新入生五名（二級三人、初級二人）です、昨年よりは遙に充實を見せ全道の試合札幌を選ぐる試合で一勝しました。難料には いつもの様に選ばれますので出来て充分實力を發揮したいと思つてゐます

太田　次は洋書部……

岡田（洋書）新入部員四名全部で十七名です。昨年は北大との合同練習を同じたいと思ひます。といふのは二十五周年を契機として內容充實をはかりたかつたのです。學校內の國立館と協力して學生一般の貸出館にしたいと思つてやつてます。今年は洋書部としては文化講演會（豫算一三〇圓）講演會から代表を出して講演させたいと思ひます。紀念事業

二十五周年記念を迎へて

學内外に呼び掛ける

5日—7日 記念事業第一聲

第一夜 文化講演會
第二夜 經濟講演會

開放された象牙の塔に集ふ觀衆の顔！顔！

學人アルバイトの展覽

記念式典來賓芳名

八日 午後五時半 九日 第二十三回 外語劇大會

遠征チーム決定

若人の血躍る 運動會

數字は躍る（五月圖書館閲覧統計）
依然王座を占むる語學と文學
線上昇に

一年 Dictionary
二年 Philosophy
三年 Economics

各學年のカラー

【第一表】

年月 / 部門	10年5月	11年5月	増加數	增加率
商業・金融	653	795	142	1.12
法律・政治	185	218	33	1.18
經濟・財政	675	908	233	1.35
歷史	112	154	42	1.38
教育・哲學・宗教	176	283	107	1.64
文學・語學	630	1.174	544	1.86
醫學	186	543	357	2.92
産業	758	795	37	1.05
雜誌	42	682	640	16.24
其他	1.118	212	906	0.19
合計	4.535	5.764	1.229	1.27
人員	3.024	3.426	402	1.13

【第二表】

學年 / 部門	1年	2年	3年
商業	94	368	333
法律	71	47	100
經濟	94	341	473
歷史	37	56	61
教育	184	17	82
文學	356	425	303
醫學	33	282	228
産業	367	219	209
雜誌	45	165	472
其他	50	62	100
合計	1.331	1.982	2.451
人員	259	486	547

【第三表】

學年 / 部門	1年	2年	3年
商業	7	31	32
經濟	1	7	54
文學	21	29	9
醫學	357	211	206
雜誌	3	—	29
其他	10	11	17
合計	399	289	347

	增加
雜誌	640
文學・語學	544
醫學	357
經濟・財政	233
商業・金融	142

	1年	2年	3年
雜誌	47	165	300
經濟・財政	473	341	132
教育・哲學・宗教	82	17	65
法律・政治	100	47	53

	1年	2年	3年
醫學	182	228	54
商業	368	333	35
文學・語學	425	393	32
雜誌	219	209	10

	1年	2年	3年
醫學	93	399	0.43
文學・語學	1.693	289	0.17
雜誌	2.104	347	0.16

4月	文學
5月	醫學
6月	哲學
7月	文學
9月	經濟・財政
10月	商業と文學
11月	商業
12月	醫學
1月	文學
3月	商業・經濟

學園文化の歩み

1. 獨立團體聯合會の充實
委員會生る

2. 文研演研の例會
興味ある中野教授の
チエホフ批判

3. 貨幣金融問題の解明へ
同研究會生る

1. 獨立團體聯合會の充實
委員會生る

2. 文研演研の例會
興味ある中野教授のチエホフ批判

3. 貨幣金融問題の解明へ
同研究會生る

學園討究

「躍進」・「熱意」

割引理髪券廢止の結果
校内に理髪館設置

SPORTS

猛打亂撃を浴せ
14—2 高商軍大勝
對豫科野球戰雪辱成る

	豫科	高商
	2	14
	0	0
	0	0
	0	0
	0	2
	0	6
	0	2

試合經過

柔道敗る
—對豫科戰—

奮戰空しく無念敗退す
對豫科ラグビー戰

庭球善戰
全小樽選手權獲得

連覇ならず
金君（本校）高障害新記錄
—對豫科陸上競技戰—

對北大豫科弓道
春季定期戰

スポーツ隨筆

オリムピヤードの由來

中村和之雄

[illegible]

SPORT IN ENGLISH SCHOOLS AND COLLEGES

Sport in English School Life.

No English school or college is complete nowadays unless it has its playing-fields and facilities for sport. Sport has become an essential part of any schools curriculum and in very few schools can a student avoid taking part in games save for reasons of health or circumstance.

The playing fields are often by the school and the masters of the school have to supervise the students' games. Neither for masters nor students is this always a welcome occupation, and the system of compulsory sport, while it is much appreciated by the students in the lower schools, is in some ways a burden on the students of the higher schools. They do not all care to spend their time as the school requires it.

But more and more nowadays they have to. It has not always been like this and even today in the colleges and universities the students have complete freedom in this respect. They may play games or they may not play them where and whenever they wish. Most of them do play games and sport has a place and importance in the life of English colleges and universities quite as great as it has in the schools.

The system of sport and opinions on its value.

It has not always been so in English schools. But in most of them today the curriculum makes strict and thorough provision for sport. Time, money, and instruction, are set apart for the training of the students by games.

The idea is that the training by sport is invaluable and that everyone must have it. It used to be that a school instructed a student in learning and thought and that only in residential schools, where the students had little opportunity for sport outside the school life, was corporate sport organised and enforced. The student who lived at home could find his amusement and exercise where he wished.

Today it is different. School authorities have in recent years acquired notions on the value of corporate training through and in sport. School games have for good or ill become the rule and displaced to some extent the freedom a boy or girl used to have in the choice of amusement.

The students in some kinds and most students in all schools find in school games all that they want. One or two find them an unwelcome necessity, which in the end they learn to tolerate and even enjoy.

But schoolmasters and educationalists alike have more or less precise notions of the value of sport and step by step in the last ten years the system enshrining it has been wrapped round the English student.

Sportsmanship and the actual value of sport.

Not everybody thinks this system is altogether for the good. From time to time you hear critics denouncing it and find the system itself being further extended and more deeply entrenched in English school life.

It cannot be that all the people who find it good are mistaken. Clearly something comes to the individual and to society from this discipline in corporate sport. It provides for the student a chance to enjoy himself in ways he could not otherwise have done and exercises faculties in him which for lack of those opportunities he would not otherwise have exercised.

The ordinary student might never learn the joy of playing a game if he did not do it on the school playing-fields; and the stimulus of enjoyment and the exertion of mind evoked by these things becomes an asset in work as well as a joy in themselves.

The student learns to forget his own significance in the effort common to himself and the men he is playing with to win and to accept stoically the accident of superior skill and adverse circumstance. In the uncertainty and disappointments and sacrifices of life sport in these small lessons makes life easier. Even the discipline of being constrained and ordered has a value beyond its object.

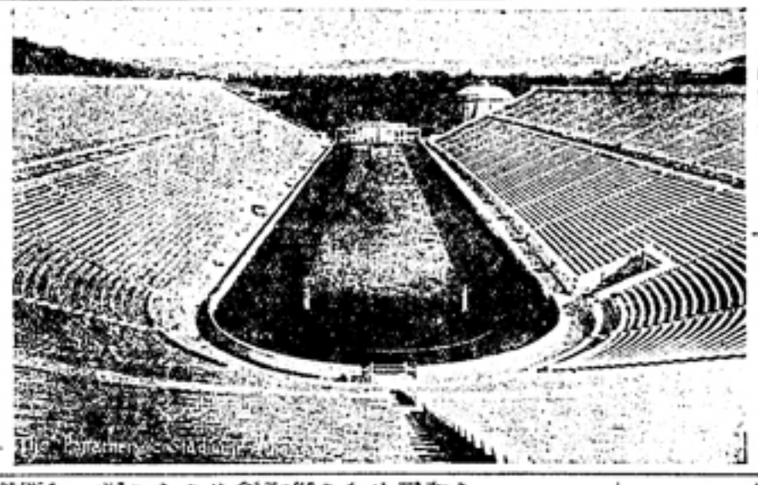
Something of this most men get from the games they play at school. For some, especially those who have learned their lessons in the older schools of England where the traditions of sport have a deeper root, there is something else to be had. It is called by the name of sportmanship and is said to be carried by Englishmen from the playing-fields of their public schools and universities out into their life after and the Empire they rule over.

They give the man they are playing against every fair chance to win and themselves take the long chance. They will act where the chances are they will lose where another man would act at most on even chances. No sportman would deceive the man he is playing against outside the rules they both understand or arrange things on his own behalf in ways which he himself would regard as underhand.

It is this native code of honour which is called "sportmanship". Whether these men are buying and selling goods, controlling subordinates or subjects, playing cards or visiting another man's house, it is the same as if they were on the playing-fields of Eton. Honour obliges that no unfair advantage be taken, but that if you may win by a risk against all likelihood you should do so. But you do it not because of honour, but because you can do no otherwise.

No one pretends that all men in England have come from public schools or that all men who do observe the rules of sportmanship. But it is looked on as a code of behaviour and its infringement as something a gentleman would not tolerate. It is based on a vague feeling for the right thing derived from practice in sport that has become habitual. Its conventions are not easily defined but they are traditional and quite real. They are at heart close to the spirit of English games. The rules of cricket epitomise them and its spirit has gone into the new English games. Whoever plays football or hockey or tennis must evince and acquire in more or less measure the spirit of sportsmanship. (to be continued)

— MACHIN —



非時のアテネオリンピヤードをそのまゝ現代化せるもの（現代の第一回オリムピックも此所で行はれた）

スポーツの健全化

非上紫電

[illegible]

スポーツと文學

松尾正路

[illegible]

メガネは……
正確で薄利の
高田眼鏡店へ
㊙呉服店ナラビ
電話　二一六八番
學生に限り一割引

上毛新聞社
有馬頼寧伯揮毫

本紙一部　金六錢
一ヶ年購讀料　壹五十錢
印刷所　群馬安角合名印刷所
編輯發行兼印刷人　小林高忠　群馬郡
電話一三五〇番
振替口座前橋五五〇番

聖上陛下本校へ行幸

畏し奬學の大御心から

聖上陛下本校へ行幸

四十分にわたり校内親しく御巡覽

（聖駕校門御通過）

瑞氣千條滿天空
鳳輦駕遊綠丘峰
奉迎萬歲震山海
龍行虎步登校庭

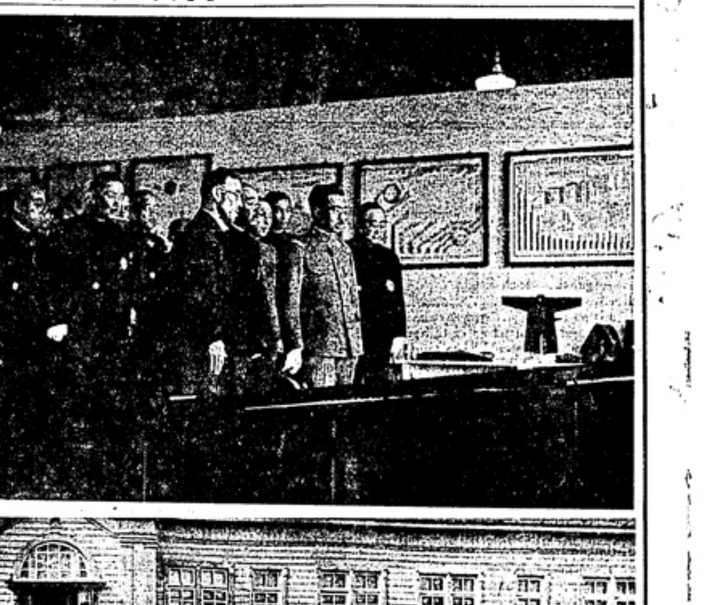
關盛良謹奉語

校務奏上を親しく聞し召さる

單獨並に列立拜謁を賜はる

行幸を仰ぎ奉りて

苦米地英俊謹話



御盛事に見た校風と雜感

配屬將校　川村　脩

成績品及實踐授業を天覽遊ばさる

展覽室に臨御遊ばさる

名殘つきざる中に還御

陛下の御興深し

野試合天覽